



Data

監督・脚本: ジャン＝リュック・ゴダール

出演: _____

■■■ショートコメント■■■

◆「世界の巨匠ジャン＝リュック・ゴダール渾身の最新作!」、「史上初! 第71回カンヌ国際映画祭【スペシャル・パルムドール】受賞作」。チラシでそう謳われると、こりゃ観ないわけにはいかない。しかし、『さらば、愛の言葉よ』(14年)、『シネマ35』未掲載)がサッパリわからなかったのと同様、本作もきっと……。

そう思う気持ちは、チラシに書かれている「静寂に過ぎない。革命の歌にすぎない。5本指のごとく、5章からなる物語——。」「私たちに未来を語るのは“アーカイヴ”である」のフレーズを読むと、ますます強まったが、とりあえず映画館へ。

◆予告編を見た時から、赤や黄色の原色を際立たせた色づかいは出色。それを白黒の昔の映像と交互に映し出すので、そのコントラストはさらに顕著になる。しかし、これがいつものゴダール流で、要するにワケがわからず、彼の思いを好きなようにスクリーン上にぶつけてくるだけだ。88歳にしてなお、これだけのイメージを持ち続けるゴダールの素晴らしさは認めるものの、もはや、私はノーサンキュー。

◆本作で「引用」される昔の(白黒)映画について、ベテランの評論家諸氏はそれなりに知っているから、その知識を披露し解説している。しかし、今年70歳になった私ですら、それらの原作は観たことがないものばかりだ。ゴダールはゴダールなりに、それらの作品のそれぞれのシーンにそれなりの意味を持たせ、イメージを膨らませているのだろうが、残念ながらそれだけの知識のない私は、ゴダールのイメージを共有することができない。

すると、どうしても、自分の知識のなさは横に置いて、こりゃゴダールおじさんの独りよがりのイメージだと思わざるを得ない。観客は満席に近かったが、さて、何割の観客が本作に満足したのだろうか……?

2019 (令和元) 年 5月10日記